

郷土

第 11 号

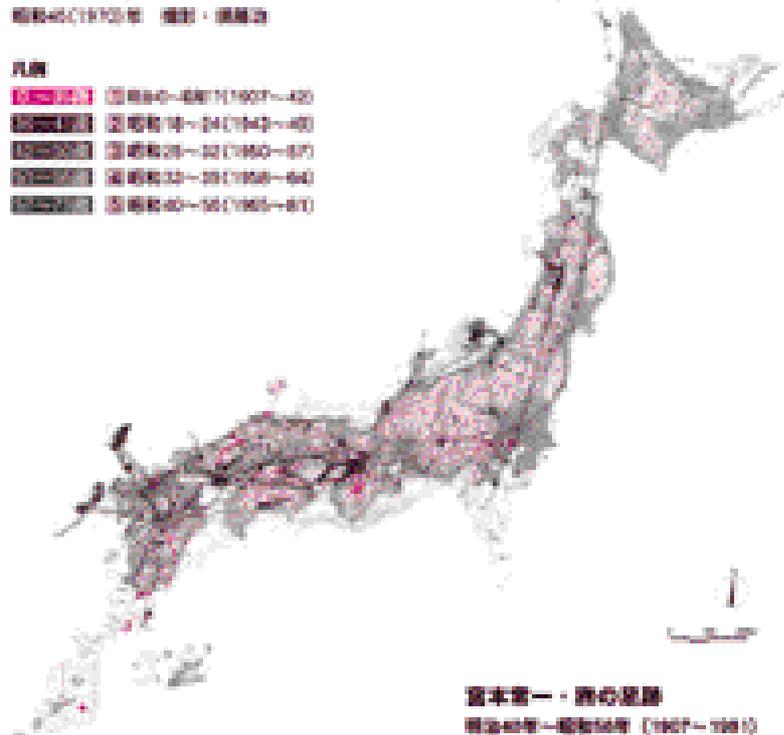
編集・発行 / 宮本常一記念事業策定審議会
東 和 町



昭和45(1970)年 撮影・横尾清

凡例

- | | |
|------------|------------|
| 昭和45(1970) | 昭和46(1971) |
| 昭和47(1972) | 昭和48(1973) |
| 昭和49(1974) | 昭和50(1975) |
| 昭和51(1976) | 昭和52(1977) |
| 昭和53(1978) | 昭和54(1979) |
| 昭和55(1980) | 昭和56(1981) |



宮本常一・旅の足跡
昭和45年～昭和56年 (1970～1981)

宮本常一・旅の足跡

宮本常一の本と写真の整理(その二)



宮本常一記念事業
策定審議会専門部会長

米 安 晟

一、デジタル技術が保存と活用に威力

平成十三年一月二二日付けの朝日新聞に「デジタル技術が保存に威力」という見出しで、「伝統文化を保存しよう」という取り組みが、デジタル技術の進歩で力を発揮し始め、各地で芸能文化の保存などに、使われ始めている」という記事が載っていたが、東和町はすでに、宮本常一の蔵書と写真の整理・保存を、此のデジタル技術で行っている。しかも、ただ保存するだけでなく、整理が終われば、インターネットで日本に止まらず海外にまで紹介し、役立つよという仕事が進んでいる。このことにより、宮本常一の蔵書・図書・写真類は、ますますその価値を増していくことになる。東和町では停年を迎えた方が、第二の人生として、此の仕事を頑張ってもらってられる。

二、宮本常一の発行図書・蔵書類・写真の整理・進捗状況

(一) 宮本常一の図書と写真は全部でいくらあるのでしょうか？

話は平成九年に遡る。東和町で宮本常一の写された写真のネガを元にして、サービスサイズに焼き付ける作業が行われていた。その頃、宮本常一の写された写真が、果たして何枚あるか、今後の利用・収納を行うためにも知りたかったので、聞き回ったが誰も知らない。ただ、膨大な枚数があるらしいということであった。

たまたま、府中の宮本常一宅で、家を建て替えたいという希望があり、同時に宮本常一の蔵書・写真類を、東和町に寄贈したいという意向を伺った。

(二) 図書類

書庫に一体何冊の図書があるか何々と、単行本以外に学会誌・雑誌類も多く、全部を数え難く、書庫の棚の長さにして、何メートルという、びっくりする返事が戻ってきた。

現場を知ることが第一と宮本家を訪

れたところ、六段の書架が二十以上ずらりと並んでいる。これに驚いていると、これだけではなく、ダンボール箱に沢山あるという。

結局蜜柑箱用のダンボール箱で百六十箱分の図書類が東和町に送られてきた。このほか、武蔵野美術大学の田村教授のところにもあり、実数で何万冊である。驚くのはこれらの本に宮本常一が、眼を通された印に、ローマ字のT(常一)とM(宮本)を併せて創った、独特の符号が表紙裏に記されていることである。(一)

(三) 写真類

また写真類についても、はつきりしたことは判らないが、宮本常一の写された写真のネガは箱に約十五箱あり、総数はあまりにも多く数えていないということであった。

ほかに宮本常一自作のアルバムが、百二十一冊あることも判明した。この時期のアルバム台紙は紙質が悪く、アルバムの写真ははがれかかったり、貸し出した後で元に戻っていないものもあり、早急に整理する必要があると考えた。

(四) 整理担当区分

そこで本や学会誌・雑誌類の整理を宮本千晴氏が、写真(ネガ・撮影写真・アルバムなど)を私が整理するという、大雑把な区分で実施することに

し、私のところに研修に来ていた学生に、アルバイトで整理を手伝ってもらうことにした。

この整理は家の建て替えの始まる平成十一年まで続き、その後写真は川崎の私の家で整理を続け、本は整理の終わったものから、東和町に送られた。

なお、図書類については、これまで武蔵野美術大学の田村善次郎教授が、目録をつくり整理に当たって来られているので、図書類の整理と最終のまとめは、田村教授が行っている。

写真については、東和町企画課が、宮本常一撮影ネガの整理と、サービスサイズの焼き付けを外部に依頼して実施し、アルバム作成と、ネガの保存、図書整理なども含め、実施継続中である。

(五) パソコンによる写真の整理と利用

平成八年から九年に掛けて、イメージスキャナ・フィルムスキャナの利用、フォトCDなどによる写真・ビデオをパソコンに取り込む方法が開発された。いろいろ調べてみると、フォトジョイスーパービスでは写真一コマにつき三十五ミリフィルムでも百円もかかることが解かった。十枚なら一千万円も掛かり、とても出来ない。いろいろ調べてみると、手間はかかるが金はかからない方法のあることが解かった。

それはパーソナル向けのフィルムスキャナによる方法やフォトCDを利用する方法である。この機械は価格が比

較的安いので、購入して実際にやってみることにした。確かに金はかからないが、フィルム一枚取り込むのに約五分を要し、価格の安い代わりに、取り込みに時間のかかることが解かった。フィルム六枚を一度にセット出来るようになっていて、終わるのに約三十分を要するので、その間別の仕事をするとか考える必要があった。気長な仕事である。

この仕事は私がしばらく実施した後、東和町に引き継がれた。

三、東和町で宮本常一の残された写真・フィルム・スライド等の整理に当たっている人々

平成十二年度までの整理分と、十三年度実施分に区別・整理すると、別表のようである。

(一) 整理状況

一) 整理済み

宮本常一の残された写真類・写真ネガ(原版フィルム)・スライドなどは、膨大な数にのぼっているが、これまでの整理済み枚数は、九万二千二百二十四枚、作製台帳数三百一冊、ならびに宮本常一自作アルバム、再貼付整理合計

百七十二冊の多きに達している。

二) 未整理枚数

また、この他の未整理枚数は、アフリカ・中国撮影写真ネガ百四本、対馬調査や戦前のもの等、合計約一万枚、その他のスライド等であるが、写真整理も漸く峠を越した感がある。

(二) 写真の管理と利用について

写真の価値は、整理し収納するだけでは、その価値は半減する。現在はパソコン・インターネットの時代である。パソコンに取り込み、整理された写真をインターネットで、広く世界中・世界中に公開し、利用の便を図れば、その価値はますます増大するであろう。私は写真整理にあたってみて、どのような方法で行えばよいか、見当がつかなかったが、「とにかく考えるより始める」と

宮本常一作成のアルバムの保存と整理

宮本常一の写した写真ネガ整理の二区分で整理を始めた。

一) アルバムの保存と整理

アルバムは昭和三十年頃、まだ紙質も良くなく、写真が剥がれかかったり、貸し出した後で元に戻っていないので、別に保存されているものがあり、整理する過程で、不明枚数が何枚あるかを調査しながら、剥がれかけた写真の貼

り直しと、欠写真と戻し写真の照合から始め、現在実施中である。

なお近年、パソコン並びに周辺機器の発達は目覚しく、写真・ビデオなどをパソコンに取り込む技術が発達した。その中に四、五年まえからイメージスキャナといって、A4サイズの大きさまでパソコンに取り込める機材が、出現したので、アルバムの整理の終わったものから、この機器を使って一ページずつパソコンに取り込む作業も開始し、これを写真の紹介に使用し、原本の保存に努めるよう実施中である。

一) これまで整理に当たった方々

東和町でも写真枚数が膨大であることから、整理方法が問題となった。調査してみると、前述のように、写真の会社に依頼すると一枚百円近く掛かり、十万余では膨大な費用となる。

これに対し金を掛けないでパソコンに取り込む方法がある。パソコンにスキャナ(例えば二コンコルスキー)を使う方法である。この機械を用いると、金はかからないが、多くの時間と労力を要する。安い費用でこの仕事をしてくださる方が、停年を迎えた人の中から見つかった。最初に郵便局を停年になられた長崎の丸一治郎さんが、続いて教員を停年になられた船越の兼田力造さんが加わり、停年になってもパソコンの取り扱いを学び、まさに熟手はかどり、三月には取り込みを終える勢いで進んでいる。

別表のようにパソコンでのデータ整理は、保存用にはDVD、利用上ではデータベース化を、蔵書の整理にはバーコード利用など、最近は大容量用にCD-R/RWも取り入れ、大切なディスクの保存も計画中である。

若い人に比べ年輩者は、今までの経験を生かし、分り難い写真の判断や、崩し字の読みなど、熟年者の実力を發揮しているのである。またアルバム整理は女性の小林早苗さんが、細かい仕事を熱心に実施され携っている。

この方たちがいなければ、恐らく仕事がこれほどまで、進まなかったと思われ、立派な仕事をしてくださり、ありがたいことである。

ここまでくれば、利用しやすくなるので、これまでにする苦勞を忘れ勝ちである。かげの苦勞があつて此処まで来たことを、忘れてはなるまいと思う。

四、今後の予定

日本の写真はほぼ終わったが、まだアフリカ・中国撮影のネガ、対馬調査等、戦前・追加分など約一万枚が残っている。

これを整理すると宮本常一撮影の写真は、確実に十万余を越すことになる。

今後は写真の利用などについて、一般への公開法、友の会設立等による普及などを考えて行きたいと思う。

別表：宮本常一寄贈図書・写真類
整理状況（平成13年度調査）

宮本常一先生が作製されたアルバム冊数

- 一 一〇二〇（手札）
- 二 一四〇（ベタ焼）
- 三 二二冊（資料等）
- 四 十一冊（アフリカ）
- 計 一七二冊

写真整理状況

- ・写真ネガ
一 整理済枚数 九二、二四枚（12年度末）

- 二 未整理枚数 三〇一冊

- 作製台帳数 八七本
- アフリカ 一七本
- 中国 五九本
- 追加分 一五三本
- 計 四一三枚

- 戦前 四一三枚
- 合計 約一〇、〇〇〇枚

未整理の写真ネガは十三年度に実施予定

台帳三〇冊

- ・スライド 未整理保存方法検討中）
- 内訳 国内、アフリカ、中国、種子島・大隈等、染型

パソコンでの写真データ整理

- 一 保存用 DVDへの保存（一〇八枚）片面一GB
- 二 データベース化

- ネガ一枚容量 七、三九三KB
- ネガ一枚容量 一五〇～二〇〇KB

読み手を旅へと煽る力

木村 哲也

瀬戸内海に、本州と四国と同時に見渡せる島がある。

宮本常一のふるさとについて書かれた文章の一節を読んで、いつか自分も訪ねてみたいものだと思った。

宮本の文章に出会ったのは、高校を卒業したばかりの一九九〇年春。岩波文庫版『忘れられた日本人』。衝撃だ。歴史の表舞台にはけっして登場しない人物が、じつに魅力的に描かれていたからだ。

宮本常一とは一体何者なのか？とにかく知りたかった。だが、当時宮本について書かれた本は一冊もなく、その人について知るには、愚直に著作を読むしか手はない。当時はまだそんな状況だった。

念願がなつて、初めて東和町を訪ねたのは一九九三年五月。大学の図書館が所蔵する宮本の著作をすべて読み終えた直後のことだ。

三年かけたことになる。白木山のとつぺんからの眺めは忘れない。自分のふるさとである土佐足摺岬沿岸とはまるで違う光景だった。黒潮が直接ぶつかる荒磯で、うっかりするとジョン万次郎のように異国に漂流してしまう生活世界と違って、無数の島があり、そこで暮らす人の気配が

ある。大小の船が絶えず往来している。

海とは陸地を閉ざす壁ではなく、人と人とを結びつける積極的な役割を果たしてきた、という宮本独自の見解は、この山からの眺めによってやしなわれたのかと、目の前の光景を見て体が震える思いだった。

そしてこの時の旅で忘れられないのが、宮本アサ子さんを初めとする、東和町の人々の親切である。お約束なしの訪問だったにもかかわらず、宿まで貸して下さった。アサ子さんという方は人を紹介する名人で、その後も全国各地の人々との出会いの機会をつくらせて下さった。

若いころに貧乏旅行をした経験がない人には、なかなかわかってもらえないだろうが、初めのうちは見知らぬ土地で人に声をかけることさえ緊張するものだ。小さな親切が身に染みる。旅先でこんなに親切にされたのは初めての経験だった。

以後、この島が宮本を旅人にしたように、ボクもこの島への旅を皮切りに、日本列島のあちこちへ、寝袋ひとつもって野宿の旅に明け暮れることになる。

宮本常一の学問や社会的活動への評価は現在も一定ではないし、今後も様々に論じられるだろうが、少なくとも

も今のボクにとって彼の魅力とは、若い人を旅へと煽る力にあると思う。だから、古老の昔話を目に涙を浮かべて聞く、といった受け取られ方は非常にマズイ。そんな懐古趣味からは最も遠い人だ。

旅をするには交通手段を考えなければならぬし、その土地で寝る場所を確保しなければならぬし、食事をしなければならぬし、途中で出会った人に道を聞いたりもしなければならぬ。悪天候のハプニングだってある。何より、自分の足で歩かねばならない。その過程で見聞きしたこと、多くの人々との出会いが、全部かけがえのない財産になってゆく。

今まで知らなかった土地、そこで暮らす人々の、独自の歴史や生活の個性に出会う喜び。それを教えてくれたのが宮本常一だった。ひるがえって、現在この国を論じる人々の「日本」のとらえ方のなんと薄っぺらなことか！

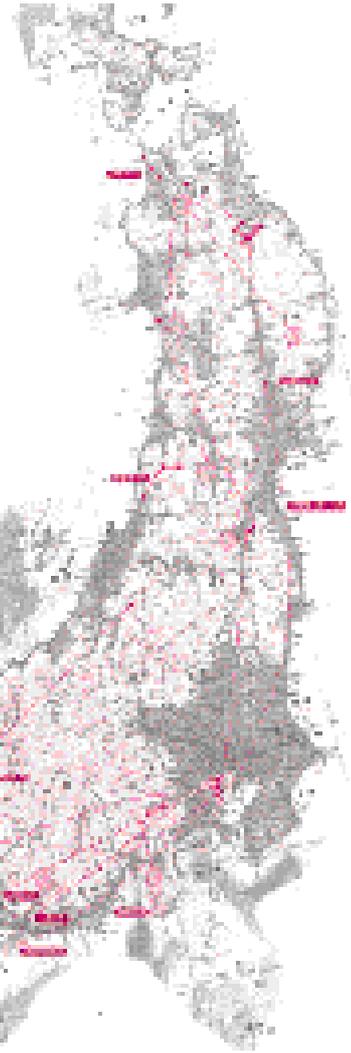
宮本の旅した土地を訪ねて歩いていくうちに、不思議なことに宮本常一再評価の風が吹き始めた。じつは、白木山からの眺望を、宮本の海への視点と結びつけて論じるのさえ、今となっては常套句となりつつある。次々と現れる宮本論を知るにつけ、それ以前に歩き始めておいてよかつたと思う。自力でたどりついた土地、そこで暮らす人々との出会いの感動は、苦勞しただけ大きいからだ。

目下、東和町では宮本常一記念事業が進行中であるという。初めてこの町

を訪ねたさいには、宮本を顕彰するものが何ひとつないのに拍子抜けし、それが宮本のふるさとらしくていいでは

ないか、と思いついたりしたものだ。しかし、事情は変わった。宮本の残した膨大な資料の整理・公開が待たれる

し、そのため現在につづけられているという地道な作業を、心から応援していきたい。



- 宮本一が訪ねた場所
- 宮本一が滞在した場所
- 宮本一が生まれた場所
- 宮本一が学んだ場所
- 宮本一が働いた場所
- 宮本一が結婚した場所
- 宮本一が死んだ場所
- 宮本一が埋葬された場所

木村哲也の紹介（敬称略） 米 安 晟

木村哲也は現在神奈川大学の大学院生である。年齢二十九才。彼は宮本常一には直接指導を受けたこともなければ、会ったこともない。それでいて、彼ほど宮本常一について知るために行動し、研究している人は少ないと思う。

宮本常一を知るために、著書はもちろん宮本常一について書かれた本を三年がかりで読んでいたという。

宮本常一研究ゼミがあれば、参加させてもらい、他の大学に行つてまで、研究に励んでいる。

さらに彼は宮本常一の著書『忘れられた日本人』に惹かれ、宮本常一の歩いた跡を旅して、宮本常一が観たものは何かを、身を持って体験しているのである。

彼は宮本常一を「読み手を旅へと煽る力」を持つ人と捉えている。これも「宮本常一の魅力」の一つであり、これを実行している人である。旅の中から本当の日本を見出しながら、進む若人に期待したい。

宮本常一・旅の足跡
明治40～昭和17年（0～35歳）



東和町を庶民文化研究のメッカに

宮本常一記念事業策定審議会専門部会委員
東京農業大学応用生物科学部長



舛重正一

島を出る足がまだ汽船だけであった頃、出稼ぎの身内との再会に胸をときめかせて、波止まで迎えに出ていた自分が、いまや出稼ぎ人間になって、溜った都会の憂鬱を癒してくれるのは、やはり故郷の自然と人情です。

故郷ほど有り難いところはありません。

東京暮らしを始めて四三年にもなるのに故郷とはなりません。何故だろうと考えてみますと、どうやら職場や専門性を通じての線の間関係はできても面としての（地域としての）ネットワークができないからだと思います。その原因は生産の効率向上と経済発展を中心の目的にして、文化を置き去りにした戦後日本の誤謬だったと思われる。

人間の崇高な目的は高い文化を持つことでしょう。にも拘らず、日常生活を楽にすること、利便性（手段）の

追求に終始した結果の行き着いたところが、昨今の異常な社会現象ではないかと思われます。文化は形あるものに限られません。実際の生活のなかで発見され、あるいは創り出された無形のものもあります。私はそれはまさしく生活の知恵だと考えます。東和町にはそのような何世代にも亘って継承されてきた知恵が沢山ありました。これから

も不断に継承されるべきものです。今日の先端技術でもにわか創りだせるものではないからです。

私が自分の学問を通じてつくづく感じ入った事例を一つあげましょう。東和町では以前どの家でも自家製の味噌造りをしておりました。醤油を造る家もありました。明治生まれの私の母もそうでした。科学の知識はまったく持ち合わせていないのに、伝承の知恵は実に合理的で見事な材料の使い分けをしていました。多分今後このような検証をする人はいないと思いますので書いておきます。

田圃が少なかったためでしょうか、味噌には大麦、醤油には小麦を使用していました。大豆は両方に使います。

大麦は米の代用で大島味噌の独特の甘味の大地になります。味噌と呼んでもよいでしょう。小麦は麩の材料になるタンパク質を多く含みますが、これは旨味の元の「グルタミン酸、味の素の成分」を多く含んでおります。大豆も同様です。かつて、夏の終わり頃になると、豊をあげた一間で大麦や小麦を麹筵に広げ麹を造っておりまして。にわか造りの麹室です。麹が出来上がると、大釜で大豆を煮て麹と混ぜ、白でついで桶に仕込んでおりました。味噌を「つく」といって一つの風物でした。

言葉に大きな意味が含まれていると思える例をも一つあげましょう。寿司は「つける」と云いましたが、これは多分「漬ける」でしょう。漬物の意味です。今日でも琵琶湖周辺には鮒を使つた馴れ寿司がありますが、これは鮒と魚を交互に重ねて重石を乗せ漬けたものです。飯は発酵して酸味を出します。この酸味は乳酸といって、味噌や沢庵、ヨーグルトの酸味と同じです、それを後の人が食酢で飯に酸味を付けたものですから、寿司は作ると呼ばれるようになったでしょう。私はバイオサイエンスを勉強してきた学生にもこのような話をするようにしてきています。

人工衛星が飛ぶようになって地球はぐんと狭くなりました。外国旅行をする人も年々増加しております。昔のお伊勢参りよりも気軽に掛けていると思います。そんな機会に触れるのが

「異文化」です。それも「食べ物」でしょう。その時、他民族の文化を実感すると思えます。生産から流通、調理、食卓と見てくると異民族文化の特徴が理解されます。

私はアメリカ留学生活で日本食を学生に馳走して随分と得をしました。彼らに振る舞つたのは巻き寿司とすき焼きが主ですが、大変喜んで日本鼻膺になります。実はその手で籠絡して言葉の勉強や書類などを作る手助けをしてもらっ魂胆だったのですが、それ以上に文化交流の効果を発揮しました。調理法はすべて母を傍で見て覚えたものです。

東和町にはそのような文化と呼ぶべきものが沢山ありました。子どもの頃には、正月から暮れの餅つきまで、節季毎の行事が待ち遠しく楽しいもので、生活のアクセントでした。

日本中のそのような庶民の生活の姿を訪ね歩いて記録し、学問として体系化したのが宮本常一です。その中の多くのものがいまや風化し、消滅しつつあります。私は生化学者で学問領域は異なりますが、先生の蒐集・記録された資料や著作は文化的に極めて高い価値のあることを理解しております。そのような貴重な財産が東和町にあることとはすばらしく世界に誇れることだと思えます。大切に保存して後世に伝えたいと思います。日本の庶民生活文化研究のメッカとして欲しいと願っております。そこからわが東和町の高い理想の未来永劫の発展が期待されます。

廿一回目の水仙忌



宮本常一記念事業策定審議会推進部長

新 山 玄 雄

真冬の大島の野辺に春を待つ可憐な花、水仙が咲き、今年も宮本先生の命日があった。先生の残された郷土大学の呼びかけで、毎年一月三十日のこの日、水仙忌として偲ぶ会を開催している。

二十一回目となる今年は、参加者も多く、七十名をこえる参加者があった。ここ近年参加者も増加している。西方の神宮寺で水仙の薫りかすかにただようなか、しめやかに法要がいとなまれ、そのあと庫裏でなごやかに会食がもたれた。時間のたつことにもりあがり、楽しい懇談の場となった。

記念講演「宮本常一のまなざし」

今回は、この命日に、ノンフィクション作家の佐野真一先生の講演が開催されることになった。佐野先生は、「旅する巨人」宮本先生と渋沢敬三氏との心の交流を書いて大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。講演の演題は「宮本常一のまなざし」で、午後二時、東和町総合センターで開催された。主催は東和町ふるさとづくり実行委員

会・東和町教育委員会・宮本常一記念事業策定審議会である。

会場は五百名を数える参加者で熱気にあふれ、大盛況だった。私もこれまでいろいろと講演会やシンポジウムの開催にかかわってきたが、文化講演会でこれほどの人数があつまり、盛り上がったことを知らない。まさに前代未聞の出来事だった。

講師の佐野先生は、宮本先生の歩みと業績、そして宮本民俗学のもつ今日的

な意義、さらに宮本先生の人間性を独特の語り口で語った。

卓越した農業技術者として、また離島振興に情熱を傾けるオルガナイザーとして、埋もれた芸能をもって活性化を図るプロデューサーとして、既成概念にとらわれない教育者として、ラジカルな思想家として、村おこし、町づくり、経世済民の先達としての宮本先生の魅力を語った。さらに、本町が立ちあげようとしている文化交流促進施設について、その意義を熱く語った。

ほぼ二時間にわたる講演は、内容がぎっしりつまったもので、聴衆もいろいろのように熱心に聞き入っていた。すばらしい内容なので、今、テープおこしをして、近いうちに本にしたいと思っている。参加されなかった人にもぜひ読んで頂きたい。



佐野真一先生

「宮本常一が見た日本」

この講演会の会場で佐野先生の著書、「宮本常一が見た日本」、「旅する巨人」、「大往生の鳥」、「私の体験的ノンフィクション術」を販売した。二百三十冊ほど売れ、なかでも「宮本常一が見た日本」は百一十冊売れたのは驚いた。

その「宮本常一が見た日本」は、「地方」と「中央」について考えようとする者、それも特に、我々のように「地方」の側に身を置いて考えようとする者には必読の一冊である。

本書は、佐野先生が講師を務めてNHK教育テレビで放送された「人間講座・宮本常一が見た日本」のテキストを大幅に加筆したものである。宮本先生が見た日本をもとにして、それがどのように変質してしまったのか、ということが重要なテーマとなっている。

その中で印象深い言葉がある。「離島でも、山村でも人間を育てなかつたところは、もう僕がいつてもとりかえしのつかないところまで事態が進行している。おそらく僕は死ぬまでこの問題に胸を痛めて歩かにならん」という宮本先生の嘆きが記されている。この嘆きに応える言葉を我々には、今持っているだろうか、考え込んだ。

官僚たちが語る宮本常一

本書の最終章に刺激的な言葉があふれている。それは「官僚たちが語る宮

本常一」の章である。宮本ファンを自認する中央官僚たちを招いての座談会だが、出席者の発言に驚き、胸をつかれる。今日、外務省はじめ官僚のいたらくが言われているなかで、この人たちは良質な部分なのだ。

その彼たちが「こう言っている」のである。

「予算配分が制度化されて、地域から知恵を出す必要がなくなりました。その派生として役場と建設業者が一大産業となるような画一的な構図となった」約三千三百ある地方自治体のうち、市・町・村の各単位で、財源も含めて任せられるのは、それぞれトップ一割、その中間は疑問あり、「疑問の中心は、もっぱら人材の問題」「何か委員会を作るうとして各分野の専門家を地元で五人集めようとしても、四十七都道府県中、大都市圏を除いたら集まらない。正直に言えば、東京から呼んだ方



▶ 柳居俊学県議会議員
(宮本常一記念事業顧問)

▶ 西木 宏町長



がよほど安いし、質も高い」「戦後の地方振興策を一言言ってしまうえば、公共事業と企業誘致です。もっとはつきりいえば、日雇いに仕事とパートの仕事をつくってきただけ」「いま過疎や離島を考えることは、死を考えることに似ている」

ランダムに引用したが、これが良心的で質の良いと思われる中央官僚たちのことばである。刺激的だがあえて引用した。彼らの率直な言葉に応じる言葉を「地方」に暮らす我々には今持っているだろうか。

これからの「地方」は、この言葉にこたえるものをいかに模索していくか、ということが課題である。地方が真に豊になるためにはこの問いに正面からこたえる気概と能力を鍛える以外にない。地方分権が進むなかで徐々に「地方」も本来の能力にめざめると思う。

混乱期はあると思うが、それほど悲観することも無いと思われる。

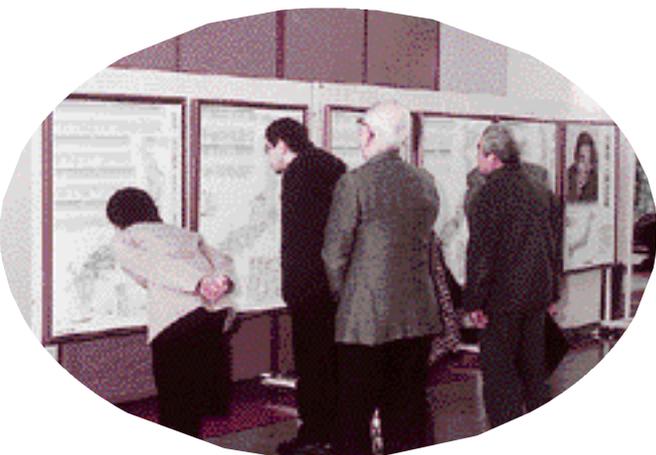
そうした時、もうじき本町で立ちあがるうとしている文化教育交流促進施設は、それらの課題に取組む、「地方」での絶好の場である。汲めどもつきない泉のような宮本学がここから発信できるのである。

佐野先生は言われる。

「もし宮本が撮影した写真のデータベースをフルに活用することが出来るならば、われわれは、高度成長によって、この国土から何が失われ、何を獲得してきたかを、一目瞭然の形で目にする事が可能となる。デジタル化時代の恩恵を生かしたまったく新しいタイプの記念館は、記録する精神をいつときも手はなさずに日本の津々浦々を歩いた宮本の遺志にふさわしいものとなるう」「この記念館は、国家的財産であり、世界中に発信できるものとなる」。そして、「この島は、日本でもっとも注目される島になる」と断言された。

熱い二時間は終わった。それぞれに胸に記すものを確かにに感じながら参加者は生活の場に戻っていったと思う。

今年の宮本先生の命日は、講演会もあり多くの人が集い、交流の場となった。考え、学ぶ場ともなった。その様子は民放三局、新聞社三社のニュース、特別番組となってひろく報道された。泉下の宮本常一先生は、どう思われたか。気になるところではある。



▶ 講演会にあわせて行われた宮本常一旅の足跡 テーマパネル展

文化教育交流促進施設事業

宮本常一先生の展示室を主体とする文化教育交流促進施設の工事が始まります。

場所は平野公有地（総合センター西側）、規模は木造平屋建、延面積1455.15㎡で完成は平成15年度末の予定です。

東和町ホームページの開設

町では、宮本常一先生の資料や東和町全般にわたるホームページを開設しました。

内容については一部調整中の項目がありますが作成次第順次公開して行く予定にしています。

アドレスは
<http://www.towatown.jp>